

---

# ラブカクテルス その27

風雷人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブカクテルス その27

### 【NZコード】

N0976D

### 【作者名】

風雷人

### 【あらすじ】

今宵は温かいカクテルはいかがですか？ご賞味あれ。

いらっしゃいます。  
どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？  
はたまた、大人の香りのマティニー？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は覗き見でござります。

じゅつくづくづく。

私は結婚した。  
ばかりだ。

なのに彼つたら、仕事仕事の毎日で、朝は早いし、夜は遅い。

付き合っていた期間が三年と、ある程度は一緒にいたから、新鮮さ  
はまあ、そんなにないのかも知れない。

それにまあ、ヤルこともそれなりにやってきてはいるので、昔みた  
いに初夜がどうのつてのもないし、生活のリズムが凄く変わった訳  
でもない。

しかも私はそれほど料理が得意ではない。

そつか、彼にしてみれば、あまりこの生活は魅力的なものではない  
のかも知れない。

それならば、料理でも少し勉強するかとテレビを付けるが、再放送  
のドラマがやっていて、ついつい見ちゃう。

あれ、いつの間にか夕方だ。

やれやれ、今日は冷凍物にして料理の勉強は明日からにするか。  
風呂も沸かさないと。彼と一緒に入っちゃお。

彼は夜の一時にやっと帰ってきた。

私はテーブルについていた肘を伸ばして、少し不機嫌な顔で彼を迎えた。

彼はかなり疲れた様子で、直ぐに風呂に入つて寝ると言つて、そそくさと行ってしまった。

テーブルには冷たくなつた冷凍物の料理が死骸のように置いてあった。

私は彼を追うように風呂に入つて、体を洗つてあげると背中を擦つてあげた。

彼は湯船に入り、大きくため息をついた。

私が湯船に一緒に入るうとすると彼は立ち上がり、お先と出でいった。

浴室の天井から冷たい雫が私の肩に落ちてきた。

そしてもう一つの雫は私の頬に落ちてきた。

私がパジャマに着替えてベッドに行くと、彼はいびきをかけて寝てしまっていた。

私はリビングに戻り、チュウハイをいつもよりも多めにあおつた。頭がぐるぐる回っている。ぐるぐるぐるぐる。

気が付くと、私は真っ暗な、何か柔らかい、そう、大きい袋の中にいた。

なんなんだ「」は。

わかつた。夢の中か。

私はほっぺたをツネつてみたが、夢からは覚めなかつた。

いつたいどうしたんだろう。どこなんだろう。ここは。

すると、どこからか、ドクドクと何か聞こえてきた。  
何の音？

私は何とか口から出ようとしてみたが、スルスルした生地みたいな壁は全然掴めるところがなかつた。

私は焦つた。

がむしやらに壁に手を走らせた時、少しの綻びに手が引っかかつた。  
私は慎重にその部分を手で掴み、引き裂いた。  
何とか外が見えるくらいの穴が開いた。

私は慌てて目を近づけてみた。

するとそこには、ヒトヒト。大勢の人々が見えた。  
私は拐われたのか？助けを呼ばなければ。  
私は必死にその小さい穴から外に向かつて叫んだ。  
叫んだが、誰も気付いてくれなかつた。

私は不安で不安でたまらなかつた。

体が震えてきた。

どうしよう。

また、外を覗いて見る。

そうしたら、あることに気付いた。

外に見える風景は見覚えのある、というより、そこは自分が住んで  
る町の商店街だつた。

私はまだ差ほど遠くに来ていないと想い、少し落ち着いて様子をみ  
ることにした。

私が見る風景は次第に駅へと入つて行つた。

凄い人の数だ。

きっと朝のラッシュ時間だらうか。

しかし、私はこんな中で、袋に入れられて担がれていのだらうか。  
こんな白昼堂々と。

誰も怪しいと思わないのだらうか？

そのうちホームに出て、電車がきた。

私の見ている風景は、満員電車の中へと入って行った。

イタタツ。

私は潰されそうだった。

助けてと叫ぼうにも声なんて出なかつた。  
く、苦しい。

そのまましばらく電車に揺られていたようだが、私は気絶寸前  
だつた。

私の見ている風景は、吐き出されるように電車の外に出されたらし  
く、私は何とか深呼吸をして正氣に戻つた。

慌てて穴を覗くと、そこも見覚えのある駅だつた。

彼が勤めている会社のある駅だつた。

私は興味深く、その穴を覗き込んだ。

やがて、その風景は幾つかの通りを曲がり、彼の会社に入つて行つ  
た。

いつたいどういうつもりなのか？

私は、まさか私を捕まえて、彼に脅しをかけたりするのではないか  
と、良からぬ想像ばかり働かせてしまつたのだが、私の見ている風  
景に、フロントカウンターの女性は、笑顔でこちらに挨拶をしてく  
る。

すれ違う人達も、手を挙げて挨拶しているし、頭を下げてくる人も  
いた。

そして口々に私の新しい名字を言つた。

えつ？ 私？

そんな。私が見えているのか？

いやそんなハズはない。

つてことは。

確かにどこか、上の方で彼の声がする。  
まさか、この袋を持つてるのは彼？  
どうなつているんだろう。

私の想像は振出に戻らないといけないようだつた。

私の見ている風景は、そのうちデスクに座つたようで、机の上の様子が見えた。

かなり汚く散らかり、「じちや」の机の上には、やはり私と彼の名字の書いてあるプレートが見えた。

その横には、私の写真がある。

なんか照れる。

しかし、今はそんな事を気に掛けてる場合ではない。  
他に何か見えないか。

私は穴をめいぱい広げて外をみた。

するとそこには、なんと、えつ？

大きな手が目の前に出てきた。

そしてその左の薬指には見覚えのある指輪が。

間違いなく彼の手だつた。

大変だ。彼つたら大きくなつちゃつたんだわ！  
いや、待てよ。

周りの人達も大きくなつてる。えつ？巨大的の世界？  
いや、落ち着けつ、お、落ち着けつ。

そうだ、違う。私が小さくなつたんじやない？

そうだ。きつとそうだ。よかつた。ふー、つて、よくないよー！

えつ、私が小さくなつた訳？

ありえなくないいい！

私はなんとなく、「こがド」だかがわかつた。

彼の上着のポケットの中らしい。

なぜなら、さつき、上からボールペンみたいなものが降つてきてつていうが、刺さつてきて、危うく串刺しになるところだつたからだ。

私は彼の胸であろう、その場所に思いつきり蹴りを入れた。

彼は少し小さい声で痛いと言つてポケットに手を当ててきた。

苦しいつてば。全く。

帰つたら只じや置かない。覚えてるつ。

私は少しむくれていた。だけど、やがてまた、穴を覗いてみた。

彼は手帳を覗いていた。

その中身は真っ暗に見えるくらいの文字の数だつた。

しかもその手帳は、前に私が送ったプレゼントの一つだつた。

彼はため息をつくと、向かい側に座つている同僚に声を掛けた。その名前には覚えがあつた。よく彼の話しに出てくる名前だ。

確かおつちょこちょいのかわいい後輩。

こんなところで、初めまして。主人がお世話を掛けて、いやいやお世話してる、かな？

でもそんなの聞こえる訳ないか。

彼は今日のスケジュールと、打ち合わせの内容や、注意点なんかを手際よく話し、後輩君に繰り返すように言つたが、後輩君は慌てて自分のメモを読み返し、でも手帳の表紙は反対だつた。

確かにおつちょこちょいみたいだわ。

彼もすかさずそれを指摘して笑つて笑つて笑つて笑つて笑つて笑つた。

そこにまた、少し低い声の貫禄のある声の男性がやつてきた。

彼の名前を呼び捨てで呼ぶと、彼はその人の名前の後ろに課長と付けた。これが噂の切者か。

彼はよく、尊敬する上司を課長と付けて呼んでいたし、彼の目標でもあると言つていた。

課長さんは軽く、彼から今日のスケジュールを聞くと、手短で的確なアドバイスを告げて、そそくさと立ち去つて行つた。

なるほど。彼が惚れるのが判る気がした。

彼は重そうなカバンを持つと、後輩君の肩を叩いて会社を出た。

今日はいい天氣だつた。彼はこれからどこに行くのだらう。仕事で向かつた先は、お洒落なデザインのビルだつた。

彼の仕事は営業だ。

色々なイベントの企画や、手配をする仕事だ。

彼の夢は、会社を大きくして、有名なアーティストの「コンサートを手掛けることだそうだ。

でも今は、怪しい宗教団体の催し物や、ネズミ「コウモガいの商談会、売れない演歌歌手の講演会などが支流らしい。

そして今日は、ネズミさんとの打ち合わせからが、仕事始めらしい。その会長とやらは、いかにも詐欺師ですと、顔に書いてあつた。指輪のセンスも最低だが、それより何よりもあの紫色のスースーとは何だろ？。ヒドイ。

その会長はかなり大きな紙を広げて、次の企画の話を持ちかけて、予算の提示までしてきた。

彼はかなり厳しいと言つたが、嫌ならしいやと、イヤらしい目でツクのだった。

憎らしい奴。しかし彼は我慢強く交渉し、会社に持ち帰る作戦に出たが、向こうもすかさず、逃すものかと今の約束を迫つてきた。その時の会長さんの目は、悪あきんどのそれだった。

下心ミミエの嫌な目は、彼を追い詰めて、次回の企画も頼むよ、の一言で彼は折れたのだった。

散々儲けいるくせに、悪あきんどが！

私はポケットの中で舌を出した。

彼は肩を落としてそのビルを後にした。

次に向かつたのは、これまたかなり怪しい寺？といつが、会館だった。

かなり豪華な作りで、意味がありそな、なさそな、ありがたいのか、ありがたくないのか、顔の歪んだ仏像がブランド品のコートを着込んで立っていた。

インチキクサイ。

彼は裏に廻り、会館の離れの屋敷に訪ねて行つた。

出迎えたのは、高そうなシルクの上下を着たスキンヘッドの、じつ

「おじさんだつた。

おじさんは彼に上がつてくるよつに行つて、ノッシノッシと奥へと消えた。

彼は礼儀正しく靴を揃えて置くと、続けて奥へと進んでいった。おじさんは、見るからに高そつなレザーのソファーに腰掛けて、葉巻を吸つていた。

彼はカバンから、厚手の封筒を差し出した。

企画書らしかつた。

おじさんはそれに目を通すと、ウンウンいいながら、気に入つたといい、書類に判を押した。

それからニーンヤリ笑つて彼に言つた。

ところで、かわいい女の子は揃いそつかい？

なんだ、今度はエロオヤジか。

彼は写真を手渡して、今回の企画のコンパニオンさんです。と言つた。

どんな企画だ、これは。

エロオヤジは顔を綻ばせて、よしよしと写真にカジリついていた。どいつもこいつも。

彼はまたため息をついて、その屋敷を後にした。

彼は駅に行き、電車に乗る前に立ち食いソバ屋に入った。食券の販売機に指を走らせて、天玉の前で迷い、すかさずキツネのボタンを押した。

なんで、天玉にすればいいのに。

それから、そそくさと蕎麦をすすつた。

その時電話がなつた。

彼が話す様子から、後輩君かららしかつた。

彼の口調は眞面目で、でも冷静だつた。

何かトラブルらしかつた。

彼は汁を残して電車に飛び乗つた。

彼の着いた所は、小さな市民会館だった。

彼が会場に入つてみると、舞台の真ん中で一人の着物を着た男が演歌を歌つていたが、客の入りはすかすかで、会場の空気は寒かつた。彼を見つけた後輩君が、息を切らせて走つてきた。

参りました。全然お客様が来ないんです。

彼は見ればわかるよと、頷いた。

後輩君の話では、今田はこの後まだ、二公演あるのに、本人は怒つてもうやめると言つてゐらしかつた。

なんなんだそれは。逆ギレか？

女の腐つたのが演歌なんて呆れる話だ。

彼は、その回の公演が終わると、楽屋に行つて、その女の腐つたのと話を始めた。

腐つた演歌歌手はかなりムクレていた。

しまいに、いきなり立ち上がり、帰ると言い出した。

彼たちは慌てて止めたが、後輩君は突き飛ばされて、壁に頭を打つた。それを見た彼は、さすがに怒つた。

自分の夢を諦めるなど。

一緒に大きい舞台に立とうつて約束したのはどうする？止めるのか？

忘れてる。心に向かって震わす拳の歌声を。

声の拳で客の心殴つてこい！

それが演歌だろうが！客へのどれくらいは数じゃない。

どれくらい心を殴れるかだ！

腐つた演歌歌手は、私は、後輩君は心を殴れた！  
すると、彼は腐つた演歌歌手の背中を押した。

一回目の公演が始まつた。

そしてそこには、まだまだだが、心の拳を持つ演歌歌手がいた。

彼はその後も公演に付き合つて、終わったのは夜の八時だった。

彼は会場を後にしてから、後輩君と会社に帰つた。

後輩君は彼に、夢は何かと聞くと彼は、有名なアーティストのコン

サートに私に見に来てもらうことだが、当面の目標はお金が貯まって、時間ができれば、海外旅行でも連れて行きたいと言つて、笑つた。

彼は会社に帰ると、今朝打ち合わせしたネズミさんの企画の手配と予算プランのための電話を何件もした。

パソコンを打つ手は、ずっと動き通しだった。

そういうえは、夕飯は食べていながら大丈夫だろうか？少し心配になつた。

その時、例の課長さんが食事に誘いにきたが、彼は妻が待つてているんでと、断つた。

わ、私はなんだか、涙が出てしました。

彼は、最終電車に乗り込んだ。

朝と同じラッシュに加えて、ヒドイ酒の匂いだつた。

私はその暑さと、匂いで頭がくらくらしだして、グルグル回り始めた。グルグルグルグル。

気が付くと、部屋のダイニングの椅子で寝ていた。

私は夢を見ていたのか？

時計を見ると、かなり遅い時間。  
いけない、彼が帰つてくる。

急いで風呂の支度をすると、そこへ彼が帰ってきた。

私は慌てて、先に風呂に入るよう言つて、夕飯を、冷凍物を使わずに何とか仕上げた。

風呂から出てきた彼にビールを注ぐと、彼は一口飲んで、ふはーつとやつた。

そして大したことのない料理を美味しいと食べててくれた。

私はその姿を見ながら、思わず鼻歌を歌つた。  
それは夢で聞いたあの演歌だった。

彼は驚いた顔をしたが、笑った。

寝る前に、私は気になつて確かめてみた。

やはり、上着のポケットには、小さな穴があつた。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0976d/>

---

ラブカクテルス その27

2010年11月28日00時27分発行